

彦根市総合計画審議会 会議録要旨

第4回 彦根市総合計画審議会全体会議		
日時	令和2年11月26日(木) 14:00~16:00	
場所	彦根市南地区公民館 大会議室	
出席者	審議会	別紙のとおり
	市職員	別紙のとおり
欠席委員	上ノ山委員、大脇委員、岡村委員、志賀谷委員、柴田委員、竹村委員、力石委員、中島委員、樋口委員、吉倉委員、吉田委員	

会議録の確定	
署名 (審議会会長)	

1. 開会

[司会]

皆さまお待たせ致しました。本日はお忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。企画振興部次長の牛澤でございます。まだお見えになっていない委員様もいらっしゃいますが、定刻となりましたので、ただいまから第4回彦根市総合計画審議会を開催いたします。本日は委員22名に出席いただいておりますので、彦根市総合計画審議会条例第5条第2項規定する定足数を満たしており、会議が成立いたしますことをご報告申し上げます。

それでは、審議に先立ちまして、事務局から連絡事項を申し上げます。会議中の発言についてでございますが、会議録を作成する関係上、発言される場合は、挙手の上、許可を得ていただきましてから、発言をお願いいたします。発言が終わりましたら、マイクのスイッチをお切りください。

また、新型コロナウイルス感染対策のため、発言中もマスクをつけたままで、ご発言いただきますようお願いいたします。

それでは、規定によりまして、これからの議事の進行は、会長様にお願いしたいと思います。会長様、よろしくお願いたします。

2. 議題

バックキャストによる検討～2033年の彦根市について～

[会長]

改めまして、こんにちは。本日は、お忙しい中ご出席いただきましてありがとうございます。みなさまのご協力を得て、活発な議論をいただき、有意義な審議会ができればと思いますので、よろしくお願いたします。なお、16時を目途に終了を予定しておりますので、円滑な議事進行にご協力いただき

ますこと、重ねてお願い申し上げます。

それでは、審議に移りたいと思います。議題としまして、「バックキャストによる検討について」でございます。議論に先立ちまして、まず事務局のほうからのご説明、よろしくお願ひいたします。

[事務局]

それでは、事務局の方から、本日お配りしております資料をもとに、ご説明させていただきます。まずお配りしております資料の確認でございますが、次第が1枚ございまして、資料4-1「審議会委員名簿」、4-2「検討委員会委員名簿」、4-3「2033年の彦根市について」、4-4「彦根市版未来年表」、4-5「スケジュール」となっております。

議題の「バックキャストによる検討」の説明に入ります前に、簡単にスケジュールのほうをご説明させていただきます。資料4-5をご覧ください。事業スケジュールにつきまして、左側が2020年度、右側が2021年度でございます。これまで8月下旬に全体会議を開催し、市民意識調査結果等について議論いただき、続いて、前回、10月の下旬に全体会議で、総合計画をフォーキャストで検討した場合の方向性について議論いただきました。さらに、11月下旬、今回の会議におきまして、バックキャストでの検討について議論いただき、最終的に10月下旬と今回の議論をふまえて、現在日程調整をさせていただいております、1月の中旬に再度全体会議を開催させていただき、これまでの議論から作成した基本構想の素案をお示しさせていただき、議論をいただきたいと考えております。さらに、部会を構成し、細かい議論につきましては部会に分かれて議論いただきたいと考えておりますので、部会構成につきましても、1月の中旬の会議で議論いただきたいと思っております。そして、2月の中旬に第1回の部会を開催し、3月の下旬に第2回の部会を開催させていただきたいと思っております。こちらのほうから、本格的な基本計画の議論に入りたいと思っております。続きまして、2021年度に入りまして、4月、5月と部会を続けてまいりまして、合計4回の部会での議論をいただいたあと、部会の結果をとりまとめまして、施策をとりまとめ、諸処の調整をふまえ、8月上旬の全体会議で答申いただきたいと思っております。最終的には来年度の12月議会での上程をめざしてスケジュールを進めたいと考えておるところでございます。従いまして、本日は、基本構想を固める上でのバックキャストでの検討と位置づけられているというところでございます。

それでは、バックキャストでの検討の案について説明させていただきます。

資料4-3をご覧ください。「2033年の彦根市について」という資料でございます。2スライド目の「2033年に向けた動き」につきまして、2033年は次期総合計画の最終年となっておりますので、バックキャストでの検討にあたり、次期総合計画に基づいて、2033年にどのような彦根市をめざすのかということの思い浮かべ、そこから必要なことを考えていくということが必要になります。未来の姿を思い浮かべるにあたって、未来年表を用いさせていただきたいと思っております。資料4-4でございます。この未来年表に関しましては、ホームページや各種計画など公開されている情報から、今後予定されているできごとなどを抜き出したものでございます。彦根はもちろん、全国、東京、関西広域、大阪、京都、名古屋など近隣の大都市圏の情報も抜き出してあります。本日の議論にあたりましては、彦根市の未来を想像するヒントとして手元において活用いただければと思います。

資料4-3に戻りまして、2スライド目の「2033年に向けた動き」は未来年表から特に影響が大きいと思われるものを抜粋したものです。続きまして、3スライド目は未来のことを検討していただくにあ

たり一番重要となる人口の推計です。こちらは先立って、前年度に改訂しました第2期のまち・ひと・しごと創生総合戦略人口ビジョンのほうで推計しておるもので、人口につきましては、徐々に減少すると推計されます。人口構成につきましては、14歳以下の年少人口と15歳以上64歳以下の生産年齢人口が減少し、65歳以上の高齢者が増加する見込みとなっております。特に75歳以上が介護等の必要性が高くなる世代と言われていますが、この世代もどんどん増加すると見込まれています。

次に4スライド目をご覧ください。バックキャストに関して、このあと説明させていただくものにつきましては、先ほどの未来年表や本市の各種計画をもとに、2033年のありうる未来を想定し、事務局で試案を作成したものです。「ありうる未来」という言葉遣いについてですが、前回、特別顧問の講演にあったとおり、「ありそうな未来」、「ありたい未来」というのが一般的にはよく言われますが、「ありそうな未来」は状況対処的、問題解決的であり、現状からの延長線上にある未来を思い浮かべる、「ありたい未来」は願望が入ってしまうので、特別顧問の資料13ページにあるように、小さな兆しから気づくことで、いろいろな可能性を発見していきたいということで「ありうる未来」という言葉遣いをさせていただいております。

2つ目ですが、作成にあたっては、第2回審議会の資料④、方向性の資料の「政策の方向性(案)」の柱建てに沿って、このバックキャスト事務局案では、分野ごとにトピックを整理させていただいております。

3つ目ですが、この資料でみなさんに議論いただきまして、フォーキャストでの検討結果と合わせまして、スケジュールで申しました通り、次期総合計画基本構想素案を作成させていただこうと考えております。バックキャストでの検討については、政策を網羅的に行うのではなくて、特に重点すべき事項の検討に用いることとしたいと考えております。なぜかと申しますと、バックキャストでの検討は、もともと民間の企業が既存の事業領域にとらわれず、新たな発展の可能性を検討するために用いられる手法で、どちらかというところ今後攻めていく分野の検討に適していると言われております。そうしたことから、バックキャストの検討に関しましては、重点的に取り組むべきトピックを検討していきたいと考えております。特に本日につきましては、この「ありうる未来」について委員のみなさまに幅広い視点で議論いただくと幸いです。

続きまして、具体的な事務局試案を説明させていただきます。

まず、ひとつ目の分野「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」、5つ目のスライドでございます。こちらに関しましては、今後、生産年齢人口の減少や高齢者の増加が見込まれます。生産年齢人口が減少してきますと、当然労働力が減ってくることから外国人人口、外国人労働者が増加し、女性活躍の進展、さらに女性が活躍する機会が増えてくるだろうと考えています。また高齢者もさらに元気に活動することが増えてくるだろうと考えています。そうしたことから、ありうる未来としまして、

- ・女性、高齢者、外国人など現在よりもさらに多様な人々が地域社会において活躍し、その活躍によって地域が活性化していく
- ・働き方改革的な視点ですが、AIやRPAなどによるオートメーション化が進む

そうした未来があるのではないかと想像しております。このありうる未来を実現するために、

- ・女性が活躍しやすい環境と、男性が育児に参加しやすい環境を整える
- ・高齢者の健康づくりを推進し、健康寿命を延ばす
- ・元気な高齢者が生きがいを持って社会参画できる環境を整える

- ・障害のある人が活躍できる環境を整える
- ・誰もが生涯にわたって学び続けることができる環境を整える
- ・新たな外国人市民と従来からの市民(外国人を含む)の相互理解を促進する
- ・業務のオートメーション化を進め、仕事の専門性を高める

などのことが必要になるのではないかと考えるところでございます。

次の分野、「子どもが健やかに育ち、若者が躍動するまち」でございます。こちらに関しましては、今後さらに、2033年に向かって、子育て環境の充実や、現在からの引き続きですが市外出身の若者の市内大学への入学を契機とした市内への流入、またコミュニティスクールや大学の地域活動などを含みまして地域と学校とのつながりの強化が想定されます。こうしたことから、ありうる未来としまして、

- ・若者が地域を学びの場として活用し、そのことによって地域が活性化していく
- ・市内外出身の若者が、地域に魅力を感じ、居着き、子どもを産み、育てていく
- ・子育ての第1義的責任は父母である一方、様々な子育てニーズに対応したサービスにより、地域社会全体で子育てが行われる

といった未来が想定され、このありうる未来を実現するために、

- ・待機児童の解消、地域での子どもの居場所づくりなどの充実など子ども・若者を支える地域づくりを進める
- ・子どもを犯罪や貧困、虐待から守り、安全に暮らせる環境を整える
- ・妊娠から出産、子育てまで安心して健康的な生活が送れるよう支援する
- ・学校教育をさらに充実させる
- ・市内外の出身を問わず若者に市内に定着してもらえるようにする
- ・市内出身で市外に転出した若者に戻ってきてもらえるようにする

などのことが考えられるかと思えます。なお、こちらに関しましては、事前にご説明させていただいた際に、会長より、学生も含めた様々な地域コミュニティについて言及してはどうかというご意見をいただいております。ぜひ委員のみなさまにも、その点を含めまして議論いただけたらと考えております。

続きまして、次の「歴史文化資源と共生し、にぎわいと交流があふれるまち」につきましては、7、8のスライド、2つのトピックを作っております。ひとつ目のトピックが、7番目のスライド、「国スポ・障スポレガシーを活用したまちづくり」でございます。こちらに関しましては、すでに2025年の国民スポーツ大会、全国障害者スポーツ大会に向けまして、新市民体育センターの整備や彦根総合運動公園の整備がハード面では進んでおります。さらに今後、大会に向けた市民意識の向上や選手の育成・強化が進んでまいります。こうしたことを進める中、2025年には国民スポーツ大会、全国障害者スポーツ大会が開催され、その際に

- ・交流人口(選手・関係者・観客)が増加する
- ・市民のスポーツに対する関心の高まりが想定される
- ・ボランティア活動等を通じた市民の「おもてなし」精神の醸成が図られる
- ・スポーツツーリズムが推進される

といった、非常に良い効果が見込まれるところです。本市としましては、2025年の国スポ、障スポで終わらせることなく、その後も引き続き継続して取組を図っていくことで、スポーツ(観戦・参加)を活

性化させ、それによって彦根市の活力の向上・まちづくりを行っていきたいと考えております。こちらに関しましては、特に市民の健康づくりなど市民目線の部分で国スポ・障スポのレガシーをどうしていくかといった点も議論いただければ幸いです。

次に、スライド 8、「世界遺産「彦根城」を活用したまちづくり」です。現在彦根市では、彦根城を世界遺産に登録するという取組を進めております。仮に 2024 年、彦根城が世界遺産登録されると、姫路城の場合は入込客数が約 15%増となっておりますので、観光客の増加、観光消費の増加により経済波及効果が増大することが予想されます。さらに観光客のまちなかへの回遊が増加することが想定されます。一方でデメリットも想定されます。交通渋滞の増加、駐車場の不足、観光客増にともない文化財の損耗が想定以上になるといった点です。このデメリットによって、世界遺産登録を機に、観光客が増加しても、その際の満足度が低ければ、かえって彦根市のイメージが悪化することも考えられ、リピーターや関係人口を獲得できないことが想定されます。また、市民の満足度が低下し、最悪の場合、市民と観光客との対立を招く可能性もあると想定されます。こうしたことから、2024 年の世界遺産登録、そして、その後も見据えまして、「世界遺産登録を見据えたまちづくり(ソフトを含む)」が必要で、世界遺産登録を一過性のブームに終わらせないようにしていくことが必要であると考えております。

続きまして、次のスライド 9、「豊かな自然に包まれ、快適で安全・安心なまち」です。この分野につきましても、主に交通に特記して書いております。市民アンケート調査等において「公共交通」に対する満足度が低いということ、前回の審議会においても公共交通に対するご意見をいただいておりますことをふまえて特記させていただいております。今後、まず高齢者の増加により免許返納者の増加が想定されます。さらに、彦根城の世界遺産登録を契機とした観光客の増加、MaaS や自動運転の発達も想定されます。MaaS とは、注釈を入れておりますとおり、複数の交通手段をひとつの交通手段であるかのように使うことができる仕組みで、最近、導入に向けまして様々なところで検討が進められているものです。また、環境にやさしいあらたな交通手段が提案されてくるということが想定されます。こうしたことから、ありうる未来としまして、

- ・ 便利な交通手段があり、自家用車がなくても快適な日常生活を営むことができる
- ・ 観光客が利用しやすい交通手段があり、交通渋滞が抑制されている

といった未来が想定され、このありうる未来を実現するために、

- ・ 効率的で利用しやすい公共交通網の充実
- ・ 彦根城周辺への自家用車の流入抑制
- ・ 駅周辺の都市機能が充実したコンパクトなまちづくり
- ・ 歩行者や自転車利用者が安心して快適に移動できるまちづくり

などが必要になるのではないかと考えています。

続きまして最後の「政策推進のための取組」についてですが、こちらに関しましては、「デジタル化とデータを利活用したまちづくり」ということが可能性としてあるのではないかと考えております。すでにご存じのとおり、2017 年 4 月に滋賀大学データサイエンス学部が開設されております。利用可能なデータがまだまだ少ないといったこともありますが、今年、2020 年のコロナ禍におきまして、デジタル化推進の必要性が明確になってきています。こうしたデジタル化により、データの集計や利用が容易になってくることが想定されます。こうしたことから、想定されることとしまして、

- ・行政のデジタル化については、おそらく国主導で進む可能性が大きいと考えておりますが、
 - ・行政手続きのオンライン化、来庁せずとも手続きが可能になること
 - ・ノンストップ化、申請主義ではなくて対象者に自動的に届く仕組み作り
- ・データを利活用したまちづくりということで、
 - ・行政データのオープンデータ化
 - ・データに基づいた政策立案(EBPM)の手法
 - ・データサイエンス分野のスタートアップ支援

が必要になるのではないかと考えます。こちらのデジタル化に関しましても、SDGs の理念と同様に、誰一人取り残さない、あるいは、誰もおいてけぼりにしないことが必要と考えます。そういった観点でも、どういったことが必要か議論いただければと思います。

説明は以上ですが、これは、あくまでも事務局の試案、たたき台ですので、これをもとに自由に議論いただければと思います。ぜひとも活発な議論をいただけると幸いです。

[会長]

ご説明、ありがとうございました。

資料 4-3 の 5 ページ目から示されている、5 つの分野ごとに議論を進めていきたいと思えます。

[委員]

ひとつ確認させていただきたいのですが、資料 4-5 の今後のスケジュールを先ほど説明されましたが、次第では、「その他」にあがっていますが、そちらでの議論になるということによろしかったでしょうか。スケジュールに関して質問したいことがあるので、後での議論になるのであれば、そこで質問させていただきたいと思えます。

[会長]

あとで議論できるということによろしかったでしょうか。

[事務局]

最後に詳細に説明させていただきたいと思えます。

[会長]

スケジュールについては、ご意見がありましたら、あとの議事をお願いします。

それでは「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」についてご意見ををお願いします。

「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」について

[委員]

「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」に該当するかどうかわかりませんが、今、いわゆる「ひきこもり」の方々が 600 万人いると言われていますが、彦根市の若者の関係で、策定された「彦根

市子ども・若者プラン」の中では、40歳以上は相手にしないとの冷たい反応でした。この審議会の中で、ひきこもりの対応をぜひとも議論できたらと思います。

また、「ありうる未来を実現するために」の中に、「誰もが生涯にわたって学び続けることができる環境を整える」ということで、公民館等での生涯学習についても、このごろ予算も少なくなってきたようで、かげりが見えているようですので、そのへんのことも議論をしたい、やはり生涯学習が必要であるということ認識していきたいと思います。2012年に全国公民館大会が滋賀県で開催された後、だんだん滋賀県内の公民館活動が非常に弱まっていると感じています。深く議論をしたいと思います。

[会長]

公民館活動や生涯学習、あるいはひきこもりの方等の支援も重要とのご指摘でございました。

[委員]

生涯学習ということで、うちの高宮町内で、県立大学の先生と学生にやっていた生涯学習の企画が、2年前、予算の関係でなくなってしまったということがありましたので、みんなが生き生きできる生涯学習、たくさんの方が寄ってこられて、先生のお話を聞かせていただいて、みんな一緒に、1歳から70歳までといういいお話をしていただいたので、生涯学習がなくならないようにということを希望したいと思います。

[会長]

生涯学習ということで、学び続けるプランを盛り込んでいかなければいけないというご発言でございました。

[委員]

「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」というと、テーマ自体が広いので、何でも含むことができるかと思います。ひきこもりは、今8050問題といって、80代の親と50代の子どもの形で長期間ひきこもっている人たちの問題が社会的にクローズアップされています。先ほどの委員のご指摘は、おそらく子ども、若者に限定しない支援が必要であろうということで「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」に課題として入ってくるべきだろうというお話だったかと思います。ひきこもり研究をしている自身の立場としては、年代関係なく、あまねくすべての人が生存権を保障されて、その人らしく生きていけるようなまちづくりをするということが基本にあると思っておりますので、その意味で、年代を問わずというところは重要です。ただ、その一方で、子ども、若者への支援というのは別の意味で重要性を帯びていますので、ひきこもりの問題などは、「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」にも入るでしょうし、次の「子どもが健やかに育ち、若者が躍動するまち」にも入ってくるだろうと思います。「ひきこもり」は状態像にすぎないので、事象によって区切ることよりも、領域横断的なことであり、横断的な視点が必要という、その典型ではないかと思います。

[委員]

高齢者という言葉がたくさん出てくるのですが、これから我々高齢者も、元気な高齢者がたくさんお

りますので、地域で活躍する高齢者もどんどん増えてくると考えています。老人クラブを結成して活動していますが、そういった活動も含めて、これから高齢者が地域で活躍できる場を、高齢者を利用した活動をどんどん地域でも考えてもらえたらありがたいと思います。

[会長]

高齢者と一口に言っても、健康に不安のある方も、元気な方もおられて、それぞれ活躍の舞台が準備されていないと、生きがいを感じられないのではないかと、その点も含めて検討していけたらと思います。

[委員]

生涯にわたって学び続けることができる環境に関して、いわゆる生涯学習のイメージとして、定年後とか、高齢者の方というのがあると思います。しかし、人生100年時代と言われる中、学校で学んで、就職して、定年してという3ステップ型の生き方ではなく、常に学び続ける、働き続ける時代、長く働く社会、また、加速度的に技術革新が起こってくる状況の中では、就職して仕事に就いた後も、常に新しく学び続けることが時代として要請されます。それに対して大学等もこたえなければいけません。就職してからも、もっと自由に働きながら学び続けられるという意味での生涯学習という観点がここに入っているのであれば良いですが、もし入っていないのであれば、抜けてはいけない点であると考えます。ある調査によると、世界中で、日本の社会人は最も勉強しない、日本の大人は大人になってから世界で一番学ばないという指摘もあるようです。定年してからということではなく、仕事をしながら、仕事をし続けるためにも学ぶという意味での生涯学習がこれから求められるだろうと思っております。この点、政府の人づくり革命の戦略等にもうたわれていたかと思っておりますので、あえて強調させていただきました。

[会長]

従来は学校、大学で学んで、就職して、退職して、老後をどう送るかという人生観であったが、これからの人生観は、学び続けて働いて、同時に楽しむような人生観に変わらないといけないというご指摘で、時代がどう変わっていくか、脅威についても情報提供が必要になってくるかと思えます。

子どもが健やかに育ち、若者が躍動するまちについて

[委員]

2点ございます。1点目は、ありうる未来を実現するためとして、「学校教育をさらに充実させる」と挙げられています。教育の充実はいつも挙がるのですが、具体的な策があまりないようにいつも思います。もう少し本市としての未来ビジョンに則って、特徴のある取組や、財政を入れこんでこれからの人材を育成していくという取組をしてもいいのではないかとということです。

2点目は、「地域と学校とのつながりの強化」と挙げられています。本市の良い面は、高校や大学をたくさん持っている文化都市であることです。現在も取組を行ってもらっていますが、大学の学生や知的財産と本市とタイアップして、よりエネルギーに、いろいろなものを創出していくことがもっ

と可能になるのではないかというように思います。文言だけのテーマ目標ではなく、大学と市が提携はしているが、もう一步踏み込んで具体的な戦略を練って、実践、効果をあげていくというものを狙っていきたいと思います。

[会長]

学校教育の充実を具体的にどうするのかという点、地域との関係をどうするのかという点をしっかり議論して計画に落とし込んでいかなければ、絵に描いた餅になってしまうということかと思えます。

[委員]

彦根市内の小学校 4 年生に、福祉学習ということでしょうかっていますが、小学校区によって生徒数のばらつきがあります。亀山は 4 年生 12 名、多いところでは旭森、城南が 5 クラスと、大規模校と小規模校のばらつきによって、子育て環境の充実、地域と学校のつながりの強化なども違ってくるだろうと思います。

小規模校については仲の良い、まとまった良さもありますが、大規模校では生徒全員に目が行き渡らない点多々あるのではないかと考えます。先日のテレビで、1 クラス 35 名を実施するという方針もあるようですし、彦根市の小学校区のばらつき、地域ごとで取組方も変わってくるのではないかと考えます。

[会長]

彦根市と言っても、地域によって差があり、それをふまえて教育についても取り組まなければいけないと思います。

[委員]

学校の話が出てきましたが、学校教育をさらに充実させる、これは当然のことで、ではどのように充実させるかが大きな、具体的な問題になると思います。ひとつめの「誰もがその人らしく生き生きと暮らすまち」と関連して、子どもたちがこれから一番長く社会を支えていく存在ですから、子どもたちがいかに躍動して活躍するか、これは一番大事なことだと考えています。

子どもはこれからどんどん減少していき、高齢者がどんどん増えていく社会がやってきます。今の子どもの現状は、よくテレビでも言われていますが、外遊びはほとんどしていません。以前は PTA の方々がパトロールなどをされていて、コンビニやスーパーにいる子どもたちに声をかけるという活動でしたが、PTA の会議でも、このごろほとんど外で子どもを見かけないという状況です。かなり前の我々の子どもの時代は、お寺やお宮で外遊びをしていましたが、そのような姿も全くみかけません。ほとんどの子が家に帰って、家と家同士で、ネットでつながりながらゲームをするという状況です。親も子どもたちに早い段階からスマホを与えて、それで子ども同士でつながるという社会です。仕方がないかもしれませんが、やはり大事なものは、子どもと人のつながり、子どもと子ども同士のつながり、子どもと大人のつながり、子どもと地域のつながりで、そこから子どもは大事なものを学ぶと思います。先ほど、高齢者の今後という話が出ておりましたが、子どもと高齢者との関わり、子どもと大学生や高校生との関わり、そういう機会を学校でも自発的にもっていこうとしています。今、コミュニティスクールという

ことも叫ばれており、彦根市でもこれからどんどん進めていくと聞いておりますが、地域の方が学校に入って子どもと交わりながら子どもの育成に関わっていただくといったようなことを市全体で取り組んでいってもらえたらと思います。

学校教育の充実について、もちろん各教科の指導内容は研修等を積みまして教員は一生懸命教科指導にあたりますが、彦根市の現状をみますと、学校施設がだいぶ老朽化しており、要望しても予算がないということで、自力で職員が直したりしておりますが、やはり子どもの学ぶ環境の整備も大事だと考えますので、取り組んでもらえたらと思います。そして、国が進めている GIGA スクール構想についても、彦根市も取り組んでいくと聞いておりますが、それについても、内容や施設の充実をしてもらえると良いと考えております。

[会長]

学校の整備、人と人との出会いの場がキーワードで、子ども同士、子どもと大人、地域の方などのつながりづくりについても含めて考えていくべきかと思えます。

[委員]

若者が躍動するまちという視点からの話です。若者に市内に定着してもらおうようにする、市外に転出した若者に戻ってきてもらうようにするには、滋賀県、彦根市に働く場所がない点、若者の非正規という言葉もよく聞かれるかと思えますが、雇用問題も含めて考えないといけないと思えます。

私が主催者側として婚活事業を 5 回行い、160 人集めました。中には男性で無職の子が参加していて、ショックを受けました。やはり働く場所、働いて税金を納める若者をつくっていかねばならないということを痛感しました。若者に定着してもらえらるまちづくりには、事業所の誘致をするなど仕事の間、雇用の場をどんどん、滋賀県、彦根市でつくっていかねばならないと思えます。

社会全体で子育てができるようにと仕向けますが、なかなか難しいです。行政も、政治でも両親に自己責任があるということで、地域全体の子育てがなかなか難しいですが、その中でもどうしていくかという視点で一緒に議論したいと思えます。

[会長]

働く場、雇用創出により若者が入ってくるような取組、非常に重要なポイントかと思えます。

[委員]

市内に定着してもらい、若者に戻ってきてもらうには、働く場、そして住むところが必要になってくると思えます。働く場がないとの発言もございましたが、この彦根にはたくさんの企業があると思えます。地場産業もあり、大企業もいくつかあり、その下請けや外注産業などもあります。次の「歴史文化資源と共生し、にぎわいと交流があふれるまち」では、産業、事業所の支援もあわせて考えていくべきだと思えます。

[会長]

彦根の産業をどうしていくかという視点も充実する必要がある、経済的な視点がぬけているとご

指摘かと思います。

[委員]

ありうる未来について、違う観点からお話させていただきたいと思います。今回出されているありうる未来が、ポジティブな変化を前提にしているように読めて、重要なことだと思いますが、例えば、若者・子どもの関連で言いますと、高度成長期ぐらいの時には、若者が貧困に陥ることは日本ではほとんど考えられていなかったと思います。それが、若者が貧困化しているということが90年代ぐらいから問題になり今も継続しています。そういったことを考えると、例えば、貧困化や二極化、格差の問題が今後さらに広がっていく現状もあるのではないかと考えます。また、コロナ禍において、かなり働き方や学び方が変化していくのではないかと考えております。大企業などでは、緊急事態宣言が出た際は出社せずリモートで働くということが行われていたと思います。比較的大きな企業で働く若者に聞いたところ、緊急事態宣言の際は10割自宅、その後徐々に戻って3割になったのが、今また5割になっており、今後はおそらく選べるようになるのではないかと話をしてくれました。そのように働き方が変わり、出社が3割ぐらいになると、居住地が変わってくるのではないかと考えます。先ほどの産業の話とも関わりますが、必ずしも近くに職場がなくても、例えば自然があるところに住みたいなど、遠隔地を選ぶこともあり得るのではないかと考えます。学び方についても同様にオンライン化、通信教育が進んでいくといったことを考えると、若者の市内への流入という点だけでなく流出も起こっていくことや、とどまりながら遠隔での学び方や働き方をする若者も出てくるだろうと思われまます。そういった点を考慮すると、ありうる未来はもう少しいろいろあるのではないかと考えます。

若者の側面で見ると、若者が躍動するまちとはどういうまちかと考えた時に、働くという側面で活躍できることはひとつ大きなポイントだと思います。一方で、生活面で考えた場合、若者が二極化、貧困化していった時に、どう社会に包摂していくか、労働の場だけではなく、生活の場で、地域の場でどう孤立を防ぎ包摂していくのか、どう活躍できる場をつくるのかということが重要になってくると考えます。その時に、ありうる未来で書かれている、若者が地域を学びの場として活用する、若者が活躍できる、活動できるような居場所を市内できちんと確保していく、創出していくということが重要ではないかと考えています。子ども・若者については関心の高い点かと思いますが、どちらかと言うと子どもに重点がおかれやすいというように感じており、若者が躍動するという点が書かれていることは非常に重要であり、若者に向けた施策も考えていけると良いと思います。

[会長]

あらゆる将来を考える時に、職住接近だけではなく、違うところに住みながら遠隔で仕事をする未来も考えられるということを想定すると、もっと多様性が出てくるのではないかと考えています。

歴史文化資源と共生し、にぎわいと交流があふれるまち

[会長]

この分野においても、スポーツ、人づくり、子どもなども関わってくると考えますので、その点も考

えながらご発言いただければと思います。

[委員]

2025年の国スポ大会、これをやり遂げて成功に収めることによって、豊かな市民を創造していこうと、大いに期待ができるところです。ぜひ一丸となって取り組むという道筋があると良いと思っております。同時に、2025年に終わった後、アフターの目標やイベントなどを大事にしながら、国スポ大会で得た、創出されたエネルギーを活かしながら、さらに進展していくような取組、2025年以降のものを考えていかなければいけないのではないかと思います。

[会長]

非常に重要なポイントで、国スポ、障スポをやった後、それで終わりではなく、レガシーと言いますか、いかに市民が引き継いで継続して、自分たちの日常に活かせるかを考えていかなければいけないと思います。具体的に、私が考えますのは、健康やスポーツに簡単に取り組む習慣が市民に共有できることや、会場が設営されれば、それを市民がいかにうまく利用するかなどがあるかだと思います。

[委員]

選手の育成・強化と挙がっていますが、それ以前に、彦根市においては、障害者スポーツがいろいろあって、障害部位によって種目が分かれています。現在、専門の指導者がいない状況です。県においては専門的にやっておられる方がいますが、彦根市では、この点が若干マイナス面になっていますので、指導者の育成もお願いしたいと思います。

[委員]

スポーツ施設の関係で以前も申し上げましたが、彦根には公営の温水プールがなくなりました。スポーツジムに行きますと、お年寄りが一生懸命プールの中で泳いでおられますし、歩いておられます。どうか、今度の新清掃センターの横ぐらいに、余熱利用をした温水プール、お風呂をつくってほしいと思います。ある地域の例ですが、一般市民の方々はお金を払っていきますけれども、立地で迷惑をかけているので、その地域の住民には一切無料にしている温水プールがあります。ここにおられる市の部長さん達もいずれ退職を迎えられ、絶対ジムへ行きたくくなります。民間のプールは、狭くて芋を洗うような状況です。ぜひとも温水プールをよろしくお願いします。

[委員]

にぎわいと交流があふれるまちをつくるにあたって、やはり交通を考えなければと思います。最近、Go Toの影響かどうか分かりませんが、市内をぬけるのに、すごく時間がかかってしまいます。そういった中、おもてなしという点からも、来ていただく方に円滑に来てもらえるまちづくりを考えていくことも重要であると思います。

[会長]

人の移動手段、交通がポイントになるかと思っています。

[委員]

交通の関係について、次の快適で安全・安心なまちにも関わりますが、高齢者の免許返納者の増加とありますが、高齢者はこの点でいろいろ心配もしております。便利な交通手段があり、自家用車がなくとも快適な日常生活を営むことができるとあり、ありうる未来を実現するための「効率的で利用しやすい公共交通網の充実」を高齢者はぜひとも望みたいと思います。これは、地域の実情にあった路線バスの運行が高齢者にとって一番の関心事です。利用がなければ走らせても意味がないので、路線バスが走るとなれば、我々高齢者も利用などに向けて積極的にいろいろと活動をして、高齢者がどんどん利用するような働きかけも取り組んでいきたいと思っています。

[会長]

将来、高齢者が増える中で、免許を返納すれば公共交通に頼らざるをえなくなるので、公共交通のあり方もしっかり考えていかなければならない、どのようなシミュレーションができるかということかと思えます。

[委員]

世界遺産の関係ですが、本当に彦根城を世界遺産にできる見込みはあるのでしょうか。プラスのことはあると思いますが、マイナスのイメージとしまして、世界遺産になると、一層、交通渋滞が発生するのではないかと、城下町の狭い道をどんどん車が入ってくるようになるのではないかと思います。自家用車の流入抑制をする方法は、パークアンドライドなどいろいろあり、原町にも基地を造っておられますが、やはり車で近くまで行きたいというのはあるのではないのでしょうか。果たして本当に世界遺産にする必要があるのかというのを私は思っております。姫路城の場合をみると、入込客数 88 万 4 千であったのが登録後 101 万 9 千となっており、もともと根強い人気があるからかもしれませんが、彦根城でも 2018 年で 72 万 3 千人、月平均 6 万人、1 日あたり 2,000 人来ていただいている、本当にありがたいことですが、これが世界遺産になりますと、余計に市民生活に支障を及ぼすのではないかと懸念します。

もし世界遺産の登録が却下されましたら、私案ですが、JR 彦根駅を「ひこにゃん駅」に改称してはどうかということも思っております。ひこにゃんは市長さんより全国的に、世界的に有名ですので、「ひこにゃん駅」に降りたら、ひこにゃんに会えるというようなことも含めてやっていると良いのではないのでしょうか。駅名改称には 1 億円ほどかかりますが、補助金などを活用して安くできる方法もあります。たくさんの人に来ていただくと、彦根市民がどのように思うか、コロナ禍で見られるような他府県の車ばかりで、他府県ナンバーを見たら、「帰れ」というような状況にならなければいいなと考えます。

[委員]

先ほどから何度も話が出ていることですが、世界遺産登録を一過性に終わらせないことは非常に大事ななことかと思えます。プラス面とマイナス面ではマイナス面のほうの話題が多いと思います。まだ話が出ておりませんが、文化財の損耗が想定以上であるという点について、これはおそらく天守を

含むことかと思うのですが、目的地が天守だけになるということをしてできるだけ回避することも大事かと思えます。中には、公開していない公有財産もあり、城内の整備もこれからだと思えます。いち早く、整備・活用していただくことによって、まちなかへの回遊もいいのですが、城域内での回遊ももう少し広がっていかないと魅力の増大にはつながらないのではないかと思います。息の長い観光を目指すべきだと思えます。

[会長]

現状をもう少し改善していく必要があるということかと思えます。

[委員]

働く場のところでもお話をしましたが、この「歴史文化資源と共生し、にぎわいと交流があふれるまち」において、資料④では産業が入っていますが、資料4-3では産業の点が出てきていないと思えます。彦根市内、多くのいろいろな企業があり、事業所も頑張ってやっておられます。その事業所について、今コロナの関係で非常に困っておられる事業所、コロナの関係で忙しい事業所、いろいろあります。産業を議論していく中で、現在、彦根市内の事業所がどのような状況にあるのかを把握する必要はないのかと思えます。前回の審議会で、市民意識調査については追加で調査する予定はないとのことでしたが、事業所の現在の状況がどうか、今後コロナが収まってからどうなっていくのかを把握する必要があるのではないかと思います。現在は厚生労働省がやっている雇用調整助成金を活用し休業しながら雇用を維持しているが、12月末でこの特例が終わった後どうなるのか心配している、ひょっとしたら倒産しないといけないかもしれないというような話をいくつか聞いています。現在も彦根市内で閉店、倒産というのも聞いておりますので、そのへんの状況を調査する必要があるのではないのでしょうか。

[会長]

企業の調査に関するデータは彦根市では持っておられますでしょうか。

[産業部長]

特に調査はしていませんが、商工会議所、職業安定所との意見交換はしています。具体的な動向までは把握していません。

[会長]

意見交換等はされているということですが、彦根市内の企業件数などは把握されていますでしょうか。

[産業部長]

企業数は具体的には把握できておりません。それぞれの企業が何かに登録するわけではなく、商工会議所の会員数は把握しています。また、統計調査の数値はわかりますが、現実的に常時把握しているかということ、把握はしていません。

[会長]

商工会議所さん等を通しての情報収集は可能ということかと思えます。必要に応じて、やっていただければと思います。

[委員]

素朴な疑問ですが、彦根城が2024年、世界遺産にもし決まらなかったら、これから計画を立てようとすることに影響はあるのでしょうか。

[会長]

世界遺産登録をめざして取組を進めている中、そこをにらんでどういうことが必要かを議論しており、それが登録されなかったら全て崩れるのかということ、そうではなくて、魅力は変わらないので、観光客も増えてほしいし、彦根を盛り上げるという視点で議論すべきではないかと思えます。

[委員]

世界遺産にならなかった場合も、市の盛り上がりはどう作っていくかという視点での議論と理解しました。

[委員]

世界遺産については、彦根商工会議所さんから寄付をいただいて、世界遺産のまちづくり、人づくりという事業を行っています。そこでも同様の議論があり、世界遺産になるかならないかに関わらず、歴史文化資源を活かしてまちづくりを進めて共生するということは、彦根において非常に重要なことですので、進めていくべきだろうと思えます。

世界遺産は、まちづくりの百貨店といえますか、あらゆることが関わってきます。現在コロナで止まっていますが、インバウンドという点でいうと、我々彦根市民の、あるいは日本の宝であったものを、どう世界レベルの目線で、その価値をどう表現するか、これは世界遺産になるならならぬに関わらず考えていくことが必要だと思います。そのための小・中・高・大における教育も必要かと思えます。また、文化庁の方々と話をする中で、今までは文化財を地域で守るという観点で市民の方が関わったり、お金を出したりということでしたが、今、文化財を活用するという観点で考えると、二条城の例でいきますと、インバウンドでいろいろな形で活用することにより、拝観料が得られ、必要十分な保存もできるようになったという例も聞いております。誰のためにとということで、市民の方にもいろいろな視点があるとは思いますが、文化財を地域で守るということと、文化財で地域を守るということも、活用する中では出てくるだろうと思えます。戦略的に守ることと活用することを考えていく段階だろうと思えます。

交通に関しては、商工会議所で地域交通研究会を作って考えていますが、もともと攻めにくいように造られている城なので、車が多く来れば、混むに決まっているわけです。車が入れないようにするのかどうか、これもゆくゆくは観光客だけではなくて、いかに歩くことを楽しめるまちにするのかとか、安全なまちにするのかということ、市民の生活にとっても非常に重要であると思えますので、観光客が来るから、お金が入るからということだけではなく、総合的に市民の生活を良くしていく上でも、文化財で地域を守るという観点での発信があっても良いのではないかと思えます。

[会長]

先ほども、にぎわいと交流は交通に関係するという話があり、高齢者の増加、免許返納という観点から公共交通が重要になってくるという指摘もありました。

[委員]

最初にお話すべきでしたが、バックキャストの説明の中で、「ありうる未来」の解釈が説明されていました。前回の講師の話から、私が受けた感じでは、10年後の彦根を見据えての計画、時代の流れが速いので、2050年ぐらいの先を見通せていないと、行政のほうは運営していけないということが様々な点で見えているということだったかと思いますので、「ありうる未来」という中途の言葉ではなく、何十年後の彦根の創出する未来、そこまでいっているんだ、あるいはつくるんだという意識がないと、そこから現状をどうしていくのか、描く未来に向けてどういう順序で進めるかというのが見えてこないのではないのでしょうか。

課題があって、その課題に乗っかって、何十年後にこういうのができて、そのためにどうするといった議論は、今までにも相当やってきている議論かと思います。その議論が中途半端なままで、行き当たりばったりになってしまっているという状況だから、違う見方で目標設定したことによって、どのように行政、あるいは市民が関わっていくかという、主体性をもつための方策だと解釈しています。そうしますと、ありうる未来ではなく、こうするんだという考え方が必要ではないのでしょうか。例えば「便利な交通手段があり、自家用車がなくとも快適な日常生活を営むことができている」という積極的な考えでみると、環境にやさしい新たな交通手段の提案については、高齢者の増加、免許返納者の増加でどうするのか、彦根城を観光資源とみた場合にどのような流れをこれからつくっていくのか、自動運転をどう取り入れるのかを、今からやっていく必要があるのではないのでしょうか。新たな交通手段について、今、北部、中部、南部を結ぶ交通手段がありますかと言うと、ありません。即座に高齢者の増加、免許返納者の増加、手段がないので、対応できるわけがないのです。その時に、どのように交通網を発達させるかということ、誰も乗らないし金ばかりがどんどん必要だしというのが現状です。そうしたら、大津などでも進められているMaaSですが、2030年にクリーンセンターが稼働するということになりますので、膨大なエネルギーが創出できます。熱だけでなく蒸気で電力を起こす、広大な地域に太陽光発電のパネルを並べることも可能で、それによって、自動運転の車のエネルギーを生む、電気をそこで取り込むことができるということが見えてくるわけです。見えたものをきちっと進めていかなければならないと思います。でないと、環境にやさしい新たな交通手段について、10年後、20年後、彦根市にこのような交通網ができていくかどうか、快適で安全・安心なまちづくりが成されているかということ非常に疑問に思います。ありうる未来を実現するためには、具体的に今どうなって、これをどのようにしていくのかというひとつの方策の立て方をしていくべきだと思います。そうすれば必ず、ありうる未来、10年後、20年後の彦根市の姿はこういう姿だというのが見えてくるのではないかと思います。ですので、部会のほうでも議論できるといいと思います。

[会長]

2033年の姿を描いて、それに向かって具体的にどう現状からよくするか、その作戦、手段、戦略、戦術を考えていくという段階で具体的なご提案をいただきました。

[委員]

環境にやさしい新たな交通手段の提案ということで、私の想像では、レンタサイクル、自転車を貸出するようなことで城下町を走っていただく、また現に彦根城のところで人力車が走っていますし、リヤカーでお客さんを乗せてというのがありますが、そういうような形で環境にやさしい取組も、人力車、リヤカー、レンタサイクルなどで解決できるのではないかと思います。

パークアンドライドですが、原町に基地を造ってバスで運ぶというのが、今どうなっているのか分からないのですが、動いていないのかなという気もしていますが、例えば、大津のほうでは、浜大津の公共駐車場に車をおいて京都に行く場合に、京阪電車を半額にするという取組をされているようです。例えば、彦根市でも、近江鉄道の沿線で駐車場を設置し、近江鉄道に乗って彦根に来ていただいて、リヤカーや人力車、レンタサイクルで走っていただくというようなことになれば、交通上で市民にも迷惑が掛からないのではないかと思います。また現在、経営が厳しい近江鉄道を救済する一助にもなるのではないのでしょうか。

[会長]

ある一画を、車を締め出して路上電車だけで走らせて回るといったような都市も、世界を見渡すと結構あるようです。環境にやさしい、人にやさしいという観点で進められるように検討していくことも必要です。

[委員]

全体的な話として年表も含め、いささか楽観的だと思います。もう少し現実的なところからのバックキャストが必要ではないのでしょうか。EUなどでバックキャストというと、例えば、地球温暖化対策としての温室効果ガス排出抑制のような課題に対し科学的根拠をふまえ、これからどのようにサステイナブルなカタチで対応できるかということに取り組んでいる訳です。今回の未来予測は妥当なんだろうとは思いますが、補う必要があるのは、ボリューム感。量的にどれぐらいで想定されているのか。非常にウェイトが大きいものなのか、あったらいいなというレベルのことなのかによって、施策の重みづけが変わってきます。バックデータも提示していただきながら、シビアな面も含めて検討していくことが必要です。「安全・安心なまち」では今日的課題として、例えば、空き家・空き地の問題、スポンジ化の進行というのが予測される中で、それらに対してどのような施策が取り組めるのかというように、これからの予測に即した対策も含めて検討する必要があります。

それと「安全・安心なまち」の中でも、横断的な施策があります。例えば、ウォークブル。駅や小さな拠点を中心とした徒歩圏、自家用車がなくても生活できる環境づくりについては、ひとつ前のページの「観光」「スポーツ・健康」とつながる施策です。さらに前のページの「働く場所」「生活場所」という点でもつながっています。また、ウォークブルについては、このコロナ禍、リモートワークをするならどこに住んでもよい訳ですから、魅力のあるまちが選ばれる訳です。リモートワークの受け入れや生

活環境のアピールなど、積極的に取り組んでいる自治体もあります。彦根は関西圏の中でも、新幹線駅が隣の米原にあり、京都大阪だけでなく東海・関東にも行きやすい立地条件にあります。豊かな自然・歴史文化や一定の利便も整っているまちですから、リモートワークのポテンシャルは高いまちだと思います。こういった観点についても、今日的状況や今後出てくる技術等を組み込みながら、横断的に施策を展開していくことが求められていると思います。

政策推進のための取組

[会長]

先ほどのご提案では、リモートで仕事ができる、そのための住む場所にする政策をどうするか、行政の政策や住む人のためのインフラ整備をどうするか、ICT化などに関わってくるかと思います。移住策や空き家の活用なども関係してくるかと思います。

[委員]

滋賀大学にデータサイエンス学部が出来たことで、市民が何をしてもらえるのか、助けてもらえるデータの活用など、どう生きてくるのかということが全く見えてきていないので、滋賀大学のほうから情報発信をしていただきたいと思います。彦根には、しが彦根新聞ぐらいしか、こういった情報が流れるところがないので、我々も活用できるような形で滋賀大学から発信してもらえるよう彦根市より要望を出してもらいたいし、我々もデータ活用に強くなっていきたいと思います。

[会長]

全体を通して、何かございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、本日のご意見をふまえ全体をみてもらい、産業の観点がどのように入ってくるのかが気になった部分ですので、前回にも、財政的なバックアップを計画にも盛り込んだらどうかというご発言もあったように思いますので、その点も配慮して修正いただければと思います。

議論はここまでとしまして、今後のスケジュールについてご説明をお願いします。

3. その他

今後のスケジュールについて

[事務局]

それでは、資料4-5をご覧ください。最初に大まかな流れをご説明いたしましたので、補足説明をさせていただきます。先ほど申しましたように、本日のバックキャストでの検討をふまえまして、基本構想の素案を1月の全体会議に提示させていただきます。素案の中の柱建てがイコール、部会構成となりますので、1月には素案とあわせて部会構成素案も提示しまして、2月以降、部会に分かれて議論いただきたいと思っております。部会は全4回予定しております、まず1回目は部会長、副部会長の選任、2回目、3回目で基本計画の素案に関しまして議論をいただきまして、最後、いただいたご意見を5月中旬の部会でとりまとめまして、修正したものをまた提示させていただきます、そこで採取の議論をいただければと考えております。その後全体をとりまとめて進めてまいりたいという流れに

なっております。1点補足としまして、現在コロナウイルス感染症のほうが拡大しておりますので、その状況をふまえスケジュールがずれ込む可能性もございますが、事務局としましては、このスケジュールを進めたいと思っておりますし、最大限これにあわせて努力をさせていただけたらと思っております。タイトなスケジュールで皆様にもお手間をとらせませんがよろしく申し上げます。

[会長]

ご質問ございますでしょうか。

[委員]

部会が4つに分かれますが、それぞれの部会を開催するのは同日の同時刻か、もしくは事務局等の関係もあり別日になるかを教えていただきたいと思えます。他の部会を傍聴したいという気持ちもございますので。

次に、調整会議ですが、各部会の部会長、副部会長8名で行われるのかどうかを教えていただきたいと思えます。

もう1点、これから一緒に仲良くやっていかなければいけないので、コンサルタントさんの体制、他市での実績など、紹介をして欲しいというのが希望です。

1月に基本構想素案、部会構成案を示し、2月にメンバーを決定するというのは遅いのではないかと、委員のみなさまはどこに参画していきたいかわかっておられるかと思えますので、1月には決定して前倒しでやっていくべきではないでしょうか。これからコロナで何が起こるかわからないということであれば、1ヶ月でも、少しでも早くすべきではないでしょうか。12月議会に上程できなかつたら、また1年延期しますということが許されるものではありませんので、どんどん前倒しでやっていく必要があるのではないかと心配しております。

[事務局]

部会に関しまして、2月、3月の部会は全体会議と同日、4月、5月の部会はそれぞれの部会という形で考えております。調整会議のメンバーにつきましては、4部会それぞれの部会長様、副部会長様8名と、全体会議の会長様、副会長様の合計10名で考えております。メンバー決定につきまして、1月中旬にしてはどうかということですが、当方としましては、まず基本構想の素案が柱建てを示す最初の機会となりまして、その柱建てごとに部会で検討をしていきたいと考えておりますので、やはりそこで提示をさせていただいて、委員のみなさまにぜひここに入りたいと考えていただきたいと思っておりますが、その場で決定するのではなく、次の全体会議でお示しして決定とさせていただきたいと思えます。

またコンサルタントの紹介が遅れましたが紹介します。

株式会社都市空間研究所の〇〇です。〇〇です。

[会長]

2月、3月は全体会議を行い、その後部会に分かれて開催し、4月、5月は各部会それぞれで調整して開催するというごことございます。2月、3月は他の部会の傍聴は難しく、4月、5月は日時が違えば傍

聴可能ということになります。

[委員]

私は心配性ですので、申し訳ございませんが、コロナでどんなことが起こるかわかりませんので、積極的に前へ進んでいかないと、立派な総合計画をつくれるのかと心配しておりますので、よろしく願いいたします。

[委員]

今後の会議開催について原則、対面でやることを前回決めた訳ですが、今回初めて提示されたスケジュール表を拝見すると、極めてタイトなスケジュールとなっています。ので、改めてオンライン参加の併用を考える必要があると思います。コロナ禍という状況ですし、足を運んでの参加がしにくい事情があってもオンラインなら参加できる機会も増える訳で、柔軟にオンラインの併用等に対応していくことを検討いただきたいという意見です。

[事務局]

全ての方がオンラインでというのは難しいので、オンライン参加とオフライン参加の併用になるかと思いますが、市の設備で両面対応が難しい状況もあり、調整には時間が必要な点もあり、技術的な点から難しい状況もございます。当方としまして、アンケートを取りました際にそのようなことを考えておりましたが、すべての人がオンラインということであれば対応できる技術があるのですが、併用となるとかなり厳しい部分もございますので、ご提言はごもっともかと思ひますし、コロナ感染のリスクを可能な限り低減させる必要もあると考えておりますが、ひょっとすると難しい状況もあるかもしれないと考えているところでございます。

[委員]

一度、検討いただきたいと思ひます。まさに、今日的課題に対し、率先して今日的対応を試みるのが総合計画の会議だと思ひます。

[会長]

事務局のほうで、どの程度なら可能かも検討いただけたらと思ひます。

[委員]

議事録につきまして、毎回修正を事務局に返しております。他の委員様からの修正もあるかと思ひます。修正されたほうの議事録をいただけてないので、委員のほうへ提供いただくべきかと思ひます。市民のみなさんに公開されている議事録は委員名も入っていませんので、委員名が入ったほうの議事録で、修正箇所が確認できるよう、いただければと思ひます。

[委員]

スケジュールにつきまして質問いたします。1つは、1月中旬にある基本構想素案の検討ですが、ここで基本構想が決まった上で3月以降の基本計画の検討に入るのかということ。もう1点は、2月と3

月の部会は、他の部会には出られないということで、各部会の議事録を共有させていただけるのか。この2つを確認させていただければと思います。

[事務局]

1月中旬に基本構想素案をいったん固めて、その後、その柱建てに従って施策の部分を部会に分かれて議論していただきたいと思いますので、基本構想素案については、1月中旬でいただいたご意見を集約していったん固めたものを3月の審議会で中間報告という形でまとめたいと思っております。また、部会の議事録につきましてはみなさんで共有できるようにさせていただきます。

4. 閉会

[会長]

これで閉会といたします。

コロナ禍でございます。体調くれぐれも十分気を付けていただけたらと思います。

今後も審議が続きますので、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

(以上)

第4回彦根市総合計画審議会 出席委員名簿

(五十音順・敬称略)

氏名	所属等
安孫子 尚子	聖泉大学 准教授
一圓 泰成	公益社団法人彦根観光協会 会長
上田 美佳	株式会社千成亭風土 取締役
上田 洋平	滋賀県立大学 講師
大西 康夫	彦根市小・中学校長会 若葉小学校 校長
奥野 資夫	一般社団法人彦根医師会 会長
小田柿 幸男	一般社団法人彦根市スポーツ協会 会長
笠原 恒夫	NPO法人日本防災士会滋賀県支部湖東ブロック 代表
加藤 義朗	公募委員
川上 建司	公募委員
岸田 清次	彦根市身体障害者更生会 会長
高橋 嘉子	社会福祉法人彦根市社会福祉協議会 事務局長
寺崎 文美	彦根市環境保全指導員連絡会議
轟 慎一	滋賀県立大学 准教授
長崎 弘法	公募委員
中村 藤夫	彦根市消防団 団長
原 未来	滋賀県立大学 准教授
馬場 加依子	彦根市国際協会
久木 春次	公募委員
廣川 能嗣	滋賀県立大学 理事長
堀口 美喜子	彦根市保育協議会 副会長
山中 清次郎	彦根市老人クラブ連合会 会長

第4回彦根市総合計画審議会 出席職員名簿

役職等	氏名
副市長	山田 静男
企画振興部長	長野 繁樹
企画振興部次長	牛澤 淳
市長直轄組織危機管理監	橋本 公志
スポーツ部長	西田 康浩
総務部長	牧野 正
市民環境部長	鹿谷 勉
福祉保健部長	田中 一朗
子ども未来部長	田澤 靖壮
産業部長	中村 武浩
都市建設部長	藤原 弘
都市建設部参事	山本 茂春
歴史まちづくり部長	広瀬 清隆
上下水道部長	廣田 進彦
市立病院事務局長	野崎 孝志
教育部長	岸田 道幸
消防長	岡田 広幸
企画振興部企画課長補佐	木戸 洋平
企画振興部企画課主査	阪東 利弥
企画振興部企画課主査	日根野 新悟